書評：『中国四大奇書の世界』

『西遊記』『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』を語る

（懐徳堂記念会編　和泉書院　二〇〇三年一月刊）

井上泰山
関西大学文学部教授。
中国古典文学、特に近世の戯曲・小説が専門。『三国志通俗演義史伝』『三国劇翻訳集』（関西大学出版部、単著）、『花関索伝の研究』『董解元西廂記諸宮調研究』（汲古書院、共著）などの著作がある。

小説はあくまで消閑のためのなぐさみ、とにかく面白ければそれでよい、とする立場から見れば、一箇の作品の作者がいかなる人物であろうと、成立の経緯がどうであろうと、そんなことは特に問題にする必要はない。実際、洋の東西を問わず、世に生み出された小説の多くは、面白いかどうか、という至極単純明快なる基準によって即座に選別され、あるものは歓迎され、またあるものは見捨てられてきた。

しかし、一口に小説といっても、その形態は千差万別である。とりわけ中国の古典小説、ことに明代後半に至って相継いで出版された長篇の口語小説は、単一の作者が才能にまかせて一気呵成に書き下ろしたといった性質のものでなく、多くの人々が何らかの形で作品制作に携わり、長い時間をかけて徐々に醸成されたものであるだけに、そこには様々な要素が流れ込み、なかなかに複雑な様相を呈している。従って、作品世界と向き合う読者の側も、単に面白いかどうか、という基準のみで作品全体を切り崩すことは困難になってくる。つまり、作品そのものをより深く読み込み、隠された本当の面白さを堪能するためには、成立の過程や時代背景、さらには作品世界を作り上げた作者の世界観など、それ相応の予備知識をもって臨むことが必要となるのであり、何の準備もなく作品世界に向き合っても、大抵の読者は作品の入り口で拒絶されてしまい、その面白さを味わうどころか、場合によっては、逆に、退屈きわまりない世界に苦痛とともに長時間たむろさせられることになりかねない。

予備知識を有することによって作品世界への入場を許される作品はといえば、『西遊記』に『三国志演義』、それに『水滸伝』と『金瓶梅』を加えた、所謂「四大奇書」がその代表格であり、書名そのものは幼い子供でも知らぬものとてなく、その主な登場人物や大まかな筋立てくらいは、大抵の人が心得ているであろう。しかし、その本当の面白さの所在を掴み取っていると豪語できる読者は、恐らくそう多くはあるまい。仮にそうだとすれば、これら「四大奇書」の魅力を要領よく解説してくれる指南書があってもよさそうなものだが、これが意外に少ない。中国の古典小説全般を通史的に説く概説書や文学史の類はこれまでにもかなり出版されているのだが、専ら「四大奇書」のみを

取り出して解説してくれる手ごろな水先案内役は、あまり見あたらない。勿論皆無ではなく、即座に思い浮かぶものとしては、かつて大阪市立大学中国文学研究室によって編纂された『中国の八大小説』（平凡社、一九六五年）がある。研究資料一覧表まで付載した懇切丁寧な書物ではあるが、これはどちらかといえば研究者のためのものであり、一般の読者が気軽に手にするには些か専門的にすぎるきらいがあった。そのような状況の中、この度、読者の先導役を果たしてくれる待望の一冊が現れた。ここに紹介する『中国四大奇書の世界』がそれである。

同書の裏表紙に付された内容紹介によれば、この書物は「平成十一年度の懐徳堂秋季講座での同テーマの講演にもとづく論集」であり、「第一線にあって活躍する中国文学研究者が、最新の研究成果を踏まえて、さまざまな角度から」四大奇書の「底知れぬ魅力と可能性を秘めた多彩な世界を」「解き明かそうとするものである」とのことであるが、その言に違わず、中国の古典長篇小説を代表する「四大奇書」の複雑な世界を独特の視点に基づいて解剖することによって、その魅力に迫るための要諦が惜しみなく開陳されている。各々の作品に関する著者と論題は左のとおりである。

金文京：『西遊記』の魅力
小松謙：三国志物語の変容
中鉢雅量：英雄たちの栄光と悲惨～水滸伝の世界～
日下翠：『金瓶梅』の世界
高橋文治：もう一つの『金瓶梅』論
赤松紀彦：舞台の上の英雄たち～演劇と小説～

「奇書」を語るからといって論題そのものも奇抜であるとは限らない。むしろ一般的とも思える論題の下には、長年中国の小説に思いを潜めてきた者のみに備わる独特の嗅覚が随所に発揮され、各々の世界に分け入るための道筋が、平易な言葉で分かり易く示されている。各々の先導役が読者に手渡してくれる鍵と、つけられた道筋の一部を左に要約しておこう。

『西遊記』の先導役である金氏が読者に与えてくれる鍵は、孫悟空や猪八戒、沙悟浄など、三蔵法師の伴となって取経の旅に出る主要登場人物の来歴と、西遊物語生成の過程に関する詳細な見取り図である。太田辰夫・中野美代子・磯部彰三氏によって積み重ねられた専門的業績を一般読者にもわかりやすく解説した上で、最後に独自の資料である「嘲転五方」に基づいて、所謂「五行思想」と登場人物との新たな接点を示唆している。

『三国志演義』の世界を読み解く先導役となるのは小松謙氏である。氏の論考の眼目は、もともと語り物として伝承された三国物語が、文字化された段階で二極化を起こし、知識人の意識に投じるための「歴史化」と「合理化」を経たものとそうで

ないものとに変容していく様を、文体上の特徴や内包される倫理観を基軸として明らかにすることにある。「七実三虚」の物語が何故出来上がったか、その隠された背景を読者は知ることになる。

『水滸伝』の水先案内人は中鉢雅量氏。一百八人の豪傑たちが様々な経緯を経てアウトローとなり、梁山泊に結集して反権力集団を形成していく姿を、林冲と楊志の落草を例に挙げて梗概とともに詳細に記述した後、梁山泊集団崩壊の原因を「義」と「忠」の観念を基軸として分析し、さらに歴史上の事実と水滸物語との整合性が具体的資料に基づいて検証されている。他の論考に比して、梗概の記述に相当数の紙面が費やされているが、思うにそれは氏の関心の所在が歴史的事実としての「反乱」に置かれているためであり、この点については氏の専著『中国小説史研究—水滸伝を中心として—』(汲古書院、一九九六年)を併せ読むことによって、理解は更に深まるであろう。

『金瓶梅』を解剖するのは日下翠・高橋文治の両氏である。作品の随所に点綴される豊富多彩な食材と料理の描写、その異常なまでの執着ぶりに着目して、中国の食文化の特徴を「快楽の永続化」に求め、さらに、小説であるにもかかわらず「唱(うた)」や「打諢(ふざけ)」などの戯曲特有の表現が多用されることから、かねてより論争の的となってきた作者問題に論点を移し、『宝剣記』の著者李開先こそが『金瓶梅』の作者でもあると結論付けるのが日下翠氏。一方、高橋文治氏は、『金瓶梅』が他の作品と一線を画すべき最大の特徴を会話の妙に求め、その具体例として、第五十八回における潘金蓮と孟玉楼の対話を取り上げ、両者の心理を克明に分析することによって、言葉の裏に隠された心理上のドラマを再現して見せる。ややもすればうっかり見過ごしてしまいそうな何気ない日常会話の中に、女性の心奥に潜む底知れぬ悪意や嫉妬の存在を指摘するあたり、氏の独壇場ともいうべきものがあり、同時に『金瓶梅』の「もう一つの」読み方とその本質を読者に示してくれる。

ところで、古来、中国においては、同一の素材が異なるジャンルに取り込まれ、各々独自の発展を遂げていくケースが頻見される。その意味で、講談と演劇、もしくは小説と戯曲とは切っても切れない密接な関係を有している。事は「四大奇書」についても例外ではなく、小説に仕組まれる一方、演劇の舞台にも登場して、各々独自の展開を見せてきた。宋代から清代までの演劇発展の歴史を概観し、「四大奇書」の中のいかなる素材がどのような形で舞台芸術に改編されているかを具体例を以て示してくれるのが、赤松氏の論考である。戯台や上演の模様など、独自の撮影による写真が提供されているのも有り難い。

さて、右に述べたように、本書は「四大奇書」の世界に足を踏み入れようとする者にとって恰好の道標となる貴重な一冊であるが、世に完璧なる書物というものもまた存在しないと思わ

れる。そこで、最後に一点、敢えて望蜀の念を記して蛇足の謗りを甘受したい。本稿冒頭にも紹介した如く、本書は元来、平成十一年度の懐徳堂秋季講座における一連の講演をもとに編纂されたものである。実は筆者も全ての講座を拝聴する幸運に恵まれたのであるが、講座担当のメンバーと本書の執筆者とは必ずしも同一人物ではない。具体的に言えば、『水滸伝』と『金瓶梅』の講座についてはそれぞれ中鉢氏と日下氏が担当されたが、『三国志演義』の講演者は井波律子氏であり、『西遊記』は赤松氏であった。そのことは本書の「編集後記」にも一応断ってあり、講座担当者以外の専門家も執筆陣に加わることによって、より充実した内容になっていることも疑いのない事実であるが、私個人の願望としては、できれば井波氏も執筆陣に加わってほしかった。というのは、「四大奇書」各々個別の世界については、右に紹介した六人の専門家によって充分な情報が与えられているのだが、さらに加えて、「四大奇書」全体を俯瞰する形での比較小説論のようなものが付載されていれば、読者は互いに異なる四つの物語を総合する形で、相違点とともにその共通点をも理解することが可能になるからである。勿論、執筆陣の人選に関しては編集子の裁量によるのであろうし、その点にまで注文をつけるつもりは毛頭ないが、講座をもとにして本書が出来上がったという経緯がある以上、そのような構成も可能だったのではないかという思いが、全書を通読した後にふと心をよぎったのである。

以上、懐徳堂秋季講座の連続講演に基づいて編纂された『中国四大奇書の世界』について、力不足を顧みず拙い紹介とともに些か余計な詮議をも試みた。世の中には、知っているつもりになっているだけで実際にはよく知らない話というものが意外に多く存在するものである。蒙を啓くためには専家の鋭い眼力が不可欠である。今回、このような形で講演の成果が世に送り出されたことによって、一般読者の「四大奇書」への関心がより一層高まり、深奥なる中国文化を理解するための新たな端緒となることを期待しつつ、拙筆を擱くことにする。